

赤十字

Japanese Red Cross Society NEWS

NEWS

8

August 2026
#1035

赤十字NEWS
オンライン版はコチラ

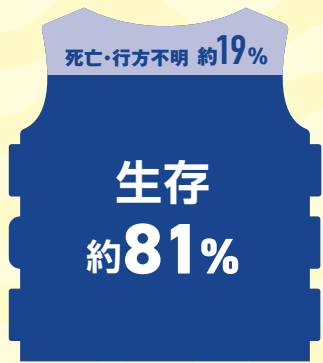


特集 ▶ P.2

海や川の危険から命を守る

水辺の事故を防ぐ基礎知識

ライフジャケットを
着用している場合の **生存率**は？

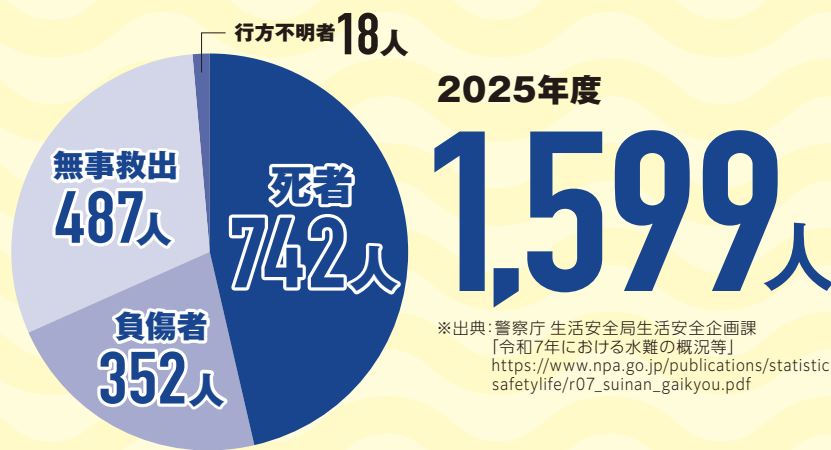


ライフジャケットを**着用**

海中転落者の生存率
ライフジャケット
着用者の
生存率は8割

※出典：消費者庁「Vol.663 水辺のレジャーではライフジャケットを正しく着用しましょう」
https://www.caa.go.jp/policies/policy/consumer_safety/child/project_001/mail/20250627/
海上保安庁「令和6年 海難の現況と対策～大切な命を守るために～」を元に消費者庁作成

全国の水辺で
起きている事故の **水難者数**は？



CONTENTS

TOPICS

- 熱い応援をして“推し”ピンバッジをもらおう！
推しハートラ応援アワード開催！…………… P.4
- 熱中症警戒アラートは、行動を変えるきっかけ
「今日は、無理をしない」…………… P.5

連載

- 海外派遣の現場から インドネシア編…………… P.4
- 「新連載」今日も笑顔のために…………… P.5

AREA NEWS

- 〔秋田〕「フレイル」対策で地域力を向上
奉仕団がフレイル予防サポーターに…………… P.6
- 〔福井〕地元放送局の防災イベントで
救助・救命活動などを実演／他…………… P.6

WORLD NEWS

- ベネズエラ地震
被災地に立ち続ける赤十字…………… P.8

Present!

「ご当地ハートラちゃん」
グッズをプレゼント

合計**15名様**
詳しくはP.7を
Check! ▶



日本赤十字社
Japanese Red Cross Society



日本赤十字社は
2027年に150周年。



古紙パルプ配合率100%
再生紙を使用



環境にやさしい植物油インキを
使用しています

SPECIAL
FEATURE

海や川の危険から命を守る

水辺の事故を防ぐ基礎知識

海水浴や川遊びなど、水辺でのレジャーが楽しいこの季節。しかし、海や川にはたくさんの危険が潜んでいます。今回は、水の事故から大切な命を守る「赤十字水上安全法」講習のポイントをご紹介します。

危険なのは「大人の注意力低下」と「流された物を追いかける行為」



飲酒やバーベキュー、携帯電話の操作などに気を取られ、子どもから目を離した際に事故が起こりがち。また、川ではビーチサンダルなどが流され、それらを追いかけることが事故につながるケースも多いので注意

穏やかに見える海でも「離岸流」に注意



離岸流とは、海岸に打ち寄せた波が沖に戻る強い海水の流れ。「白波が立たない場所がある」などが見分けるポイントだが、一般人には判断が難しいので、監視員などの見守りがある海水浴場を選ぶのが原則

安全な水遊びのカギは「体調管理」と「ライフジャケットの正しい着用」

「近年は、キャンプやマリンスポーツなど、水辺のレジャーが人気ですが、川や海の危険に関する知識が不十分で、思わぬ事故に遭うケースが後を絶ちません」と語るのは、赤十字水上安全法指導員の佐藤藍さん。これらの遊びを安全に楽しむための第一歩は、まずは体調管理から、と佐藤さんは言います。

「非日常のイベントに気分が高揚していますが、体調にいつもと違う感じはないか、冷静に見極めることが大切です。特に子どもは、多少調子が悪くても楽しみが勝って、『大丈夫!』と答えがち。頭やおなかの痛くないか、ダルさや熱っぽさはないかなど、具体的に尋

ね、しっかり観察しましょう。また、水に触れていると油断しがちですが、熱中症対策も忘れずに。こまめな水分補給と休憩を心掛けましょう」

そして、水遊びをする上で積極的に着用してほしいのが、ライフジャケット。

「ライフジャケットは、水遊びのシートベルト。体に合ったサイズを選び、サイドベルトと股ベルトを正しく締めることが大切です。子どもが大人用を着ると、水中で体が抜けてしまうことも。また、小型船舶に乗るときや磯遊び、川遊びなどの用途や使用場所に依りて、安全基準を満たした物を選びましょう」

前日の雨、上流の天候でも安全は左右される



川のレジャーは、急な増水や水流の変化が発生する危険も。自分たちが遊んでいる場所・時間の空模様だけでなく、広い視点で危険を予測することが重要

ちましょう」

この時、ライフジャケットを着ていれば、浮き身＝仰向けの姿勢も無理なくできます。川であれば両足を下流に向け(岩などに頭がぶつかるのを防ぐため)、海であれば両足を岩場の方に向けて膝を曲げ、足を水面近くにあげて、けがを防ぐようにします。

では、水辺で溺れている人を見つけた場合の救助で気をつけることは?

「自ら水に入って助けに行くことはしないでください。救助者自身の安全を確保し、二次事故を防ぐことが原則です。それを踏まえた上で、最初に行うのは、周囲の人に知らせ、人を集めること。そして、川なら119番、海で沖に流されたなら118番*に通報して助けを呼びましょう。救急隊が来るまでに、ペットボトルなど、浮き具の代わりになる物を使って救助を必要としている人の呼吸を確保することが重要です」

救助者は、溺れた人に声を掛け、落ち着かせることも大切。慌てずに浮いて待つよう、呼びかけましょう。

*118番:海上保安庁の緊急通報用電話番号

救助は水に入らず、相手の呼吸を確保する



広島県支部／看護師
さとう あい
佐藤 藍さん

学生時代に競泳で鍛えた泳力を生かすべく、ライフセービングと水上安全法指導員の資格を取得。病院から日赤広島県支部に異動し、講習担当として水難事故防止の技術の啓発を行う。

プールや海での講習とは? 紹介動画は▶



水上安全法 紙上講習

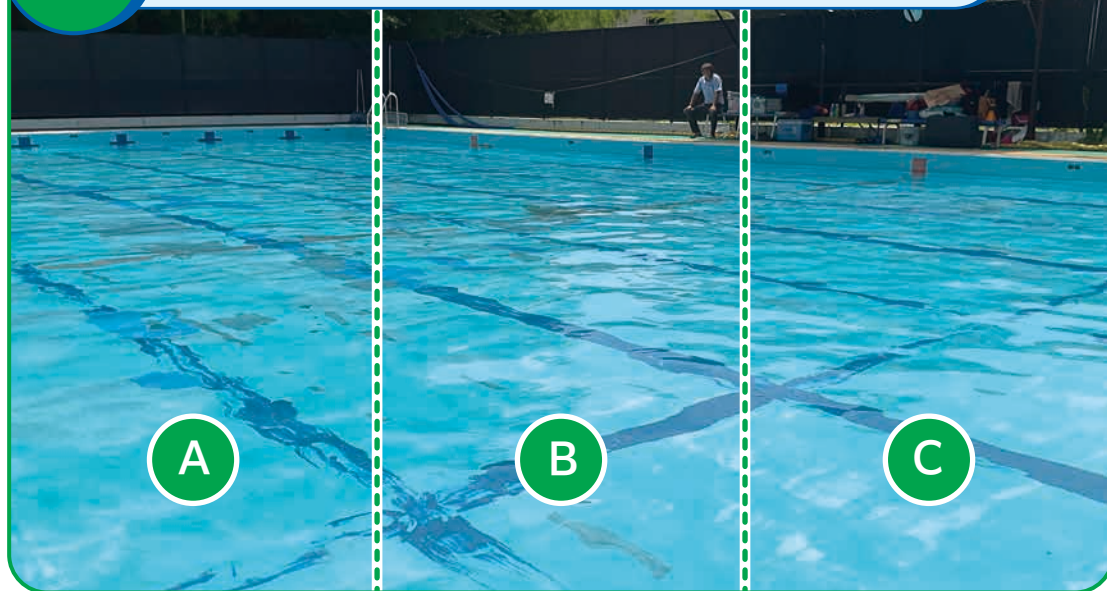
水辺で、命を守るために

水に浮かぶ技術、
ライフジャケットに
ついて



いざというとき、自分とまわりの人の命を守るためにできることは? 京都府支部で行われた水上安全法講習の事例から、その行動のポイントをご紹介します。

Q1 溺れている人がどこにいるか分かりますか?



(正解はB。左から縦のライン3本目の付近に子どもの人形が沈んでいます)

選択肢

A:ゾーンAの中央
B:ゾーンBの上部
C:ゾーンCの中央

解説

「助けてー!」の音が聞こえないことも

「溺れる」というと、水面で両手をバシャバシャとしながら大声で助けを呼ぶ人をイメージするかもしれませんが、実際は声も出せずに短時間で水没するケースが多いです。さらには、左の写真のように、どこに人が沈んでいるのか、ひと目では判断しづらいもの。「溺れる人を出さないこと」を大前提に、水遊びでは2人1組の「パディ」を意識し、常にお互いの安全を確認しましょう。

Q2 自分が溺れてしまったら、まずどうする?



選択肢

A:浮いて呼吸を確保する
B:全力で泳ぐ
C:浮く物を使う

解説 (正解はAとC)

泳がず、まずは呼吸を確保する

溺れてしまったとき、体力を消耗すると、水没につながります。無理に泳がず、自然に体が水に浮く「浮き身」を取って救助を待ちましょう。口と鼻さえ水面に出ていれば、呼吸が確保できます。川や海で流されたなら、両足は流される方向に向けて。靴や服を身につけている場合は、脱がずにそのまま浮く姿勢をとります。スニーカーなどは浮力がありますし、服は空気を溜めることができる上に、体の保温とケガ防止にも効果を発揮します。



京都府支部
水上安全法指導員(ボランティア)
ながお かずの
長尾 一美さん

コメント

水上安全法講習では、溺れている人を救助する方法だけでなく、衣服を着た状態で水に落ちたときに救助を待つ「着衣泳」を行っています。流れのないプールの水でも、ただ浮いて待つことは難しいものですが、川や海では水面が動くので、口や鼻から水が入り、より一層、呼吸を確保することが困難です。その場合に有効な「エレメンタリーバックストローク」も練習します。これは浮き身の状態でゆっくりと手足を広げる・閉じるを繰り返すことで推進力が得られ、何もしないよりも浮くことができる技法です。泳げない方でも溺れない方法を学べる講習なので、泳げなくても参加が可能です。

Q3 溺れている人を見つけたら、どうする?



選択肢

A:すぐに水に入り、浮くように支える
B:長い棒や浮く物を探す
C:周囲に大声で知らせる

解説 (正解はBとC)

水に入らず、助ける方法を考える

溺れた人を泳いで助けに行くことは、大きな危険を伴います。必ず自分の安全は確保し、二次被害(事故)を起こさないことが大切です。いち早く周囲の人に知らせて協力を求め、沖に流されていたら118番に通報しましょう。浮力のある物や棒、ロープなどを使って、水に入らないで助ける方法を考え、溺れている人が早くそれらをつかめるようにします。溺れて気が動転していると救助が難しくなるので、陸から声をかけて落ち着かせましょう。



T P I C S



1
TOPICS

熱い応援をして“推し”ピンバッジをもらおう！

推しハートラ応援アワード開催！



全国47都道府県の魅力をまとった「ご当地ハートラちゃん」の中から、あなたの“推し”を募集する「推しハートラ応援アワード」を開催中です。「癒やされた」「行ってみたいになった」「地元愛を感じた」など、それぞれのハートラちゃんへの熱い応援コメントが全国から続々と寄せられています。心を

動かされた“推しハートラ”と、その理由をぜひ教えてください。熱心な応援コメントを寄せくださった方の中から94名様に、その方の“推しハートラ”のピンバッジをプレゼント。皆さんの一票と応援メッセージで、ご当地ハートラちゃんの魅力を一緒に広めてください。

全国から“推しコメント”が続々と！

全国の皆さん、雪の妖精シマエナガのかわいらしさと北海道の大自然を感じてください！(北海道・50代)

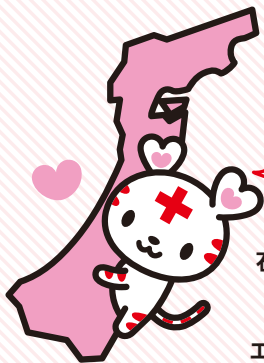


シマエナガハートラちゃん

ペロッと出した舌がとにかくかわいい！被り物にちゃんとタコの足がついていたり、爪楊枝をしっかりと持っていたり、細かい部分への配慮が素晴らしい(島根県・30代)



たこ焼きハートラちゃん



石川県ぎゅっとハートラちゃん

このピンバッジをつけ始めてから、いろいろな方から声をかけてもらいました。なぜこれを選んだ？などの話題も増え、同時に笑顔も増えました(群馬県・40代)

エビフライハートラちゃん



ほんとうに可愛くて、疲れているときも、ちょっと気持ちが落ちているときも、えびふりゃ〜ハートラちゃんを思い出すと、不思議と力が抜けちゃう(愛知県・20代)

「推しハートラ応援アワード」の部門賞リスト

- 癒やされた部門
- 行ってみたいになった部門
- 意外性がすごかった部門
- 地元愛を感じた部門
- 赤十字らしさが出てた部門

このほかにも
10部門を予定

応募要項

詳しくは投票サイトにアクセス。熱い応援コメントもお待ちしております！全国ご当地ハートラちゃんピンバッジのプレゼント企画も！

投票サイト



締め切り 8月31日。今すぐ投票しよう！

Vol.8

海外派遣の現場から

インドネシア編 Part3

世界の現場で出会った人々とのふれあい、その土地でしか感じられない息づかい。日赤職員が見た、笑顔や驚き、そして心に残る瞬間をお届けします。

キラキラの国の、おおらかな人たち



リポーター
よしだ たけし
吉田 健志さん

インドネシアの方々に日本の防災教育を紹介する吉田さん

防災教育の普及支援と視察のため、インドネシアを訪れました。赴任して間もなく、現地をよく耳にした言葉があります。それは「キラキラ(kira-kira)」。「およろこび」「うれしい」という意味のインドネシア語です。細かなことにこだわりすぎず、おおらかに物事を捉える現地の人々の気質を表す言葉でもあります。

ある日、私たちは沿岸部の小学校を訪問しました。立地的に地震や津波への危機感を強く持っている学校で、周辺には避難経路を示す標識も数多

く設置されていましたが、先生方いわく、「実際に避難所まで歩いたことはない」とのこと。そこで、日本の学校の避難訓練を紹介し、子どもたちと一緒に避難所まで歩いてみてはどうかと提案しました。

また、村役場では住民の方々へ非常持ち出し品について説明。その中で、携帯トイレの実物を見せながら紹介したところ、皆さんが一斉に怪訝そうな表情に…。災害時用のトイレを備蓄するという発想がなかったようです。備蓄する理由や使い方を説明すると、次々と「今まで考えたことがなかった」「確かに必要かもしれない」といった声。日赤現地事務所のスタッフ、アワルディンさんも「日本ではとても細かいことまで事前に考えている。想像して備えていないと実際の災害では、どうなると思う？」と補足します。災害を想像して備えておくことの大切さを、あらためて一緒に考える機会となりました。

一方で、時折表れるアバウトさに思わず笑ってし



防災について学ぶ子どもたち。教室には終始、元気な声があふれていました

まうことも。村でインタビューをした際、人口構成について尋ねると、「0歳から5歳は735人、6歳から12歳は311人」と細かく調べて教えてくれました。ところが次の瞬間、「あとは13歳以上で7000人くらい」とひと言。思わず「いきなり“キラキラ”すぎる！(笑)」とツッコミたくなりました。

防災について真剣に学び合う日々の中で、私の心に残ったのは、そんな現地のおおらかさと人々の明るさでした。

2 TOPICS

熱中症警戒アラートは、行動を変えるきっかけ 「今日は、無理をしない」

今年も全国各地で厳しい暑さが続いています。こんな季節に、ぜひ活用したいのが「熱中症警戒アラート」。環境省と気象庁が発出する情報で、メールやLINEなどで通知を受け取ることができます。暑さ指数（WBGT）をもとに発表されるこの通知は、「今日は命を守る行動をとろう」という、危険を知らせるサインです。

通知が届いた日は、「いつも通り」で過ごさないことが大切です。熱中症は、**体調を崩してから対処するよりも、その前に行動を変えることで予防**につながります。喉が渇く前に水分を補給する、日傘や帽子を準備する、外出時間をずらす、屋外での活動を控える——。朝のうちに「今日は少し予定を変えよう」と考えることが、熱中症から身を守る第一歩になります。

また、自分だけでなく周囲にも目を向けてみましょう。離れて暮らす高齢の家族に「今日は熱中症になりやすい気候だから、涼しく過ごしてね」「エアコンはつけている？」「水分は摂っている？」と電話やメッセージで一言伝えることも、予防につながります。ほんの少しの声かけが、相手の行動を変えるきっかけになるかもしれません。

暑さを我慢して頑張ることは、けっして褒められるものではなく、むしろ、なるべく避けなければなりません。熱中症警戒アラートが届いた日は、「今日は体をいたわる日」と意識して過ごすべきです。**熱中症警戒アラートは、自分や大切な人を守るアクションを起こす合図**、と捉えて、行動につなげていきましょう。

天気予報だけでは分からない危険があります

熱中症リスクがより高いのは？

A 気温35℃ 湿度40% < **B 気温31℃ 湿度80%**

気温だけではなく、湿度も熱中症リスクに大きく影響します。



暑さ指数（WBGT）とは？

気温だけでなく、湿度や日射なども合わせて*1、熱中症の危険度を判断します。



WBGT=Wet Bulb Globe Temperature

*1 この3つに加え、風（気流）も指標に影響します。

*2 日射を浴びたときに受ける熱や、地面、建物、人体などから出ている熱。

暑さ指数（WBGT）
↓
熱中症の危険度を示す指標

通知が届いたら、今日の行動を少し変えよう！

通知1本で、こんなに行動が変わる！



熱中症予防情報はこちら
メール通知の登録もできます



今日も笑顔のために

今日も明日も、福祉施設の利用者や子どもたちの「笑顔」のために、明るく全力で。

赤十字の福祉施設だより

Episode 01

日赤岩手乳児院編

「これ、ください!」 勇気を出してお買い物

盛岡の夏を彩る七夕まつり。毎年旧暦の七夕頃＝8月上旬に開催され、アーケードには七夕飾りと共に、たくさんの屋台が立ち並びます。このお祭り、岩手乳児院の子どもたちにとっては、とある社会経験ができる貴重な機会となっています。

「このゲームならあと2回できるけれど、あっちの食べ物も買えるよ？ どうする？」乳児院の職員が、「おこづかい」から何をかうか聞くと、子どもたちは迷いながらも決断し、小さな手に握りしめたお金を、お店の人に渡します。

「乳児院には0歳から5歳の子がいますが、この子たちはお金を知らずに育ちます。家庭では当たり前の「お買い物」は、乳児院で育つ子どもにとっては特別な経験。買いたいものを自分で選び、好きなものを食べて、楽しい思い出にもなっています」

そう話すのは、日赤岩手乳児院 保育士・里親支援専門相談員の山口瞳さん。一人あたり「おこづかい」は1000円～1500円、これは乳児院の予算から出ていますが、家庭のおこづかいと違い、多くの大人たちが手続きと調整に関わっています。

このような社会経験はもちろん、普通の家庭で味わえる幸せな日常を経験できるのが「里親制度」です。乳児院では、子どもたちの日々の養育とともに、里親委託に向けた支援にも力を入れています。しかし、血のつながった家族・親族が里親委託に踏み切れず、施設で生活をする子どもも少なくありません。

「自分では育てられないけれど、孫を手放したくないと里親委託に反対していたおじいさんがいました。その方はできる限り、その子に会いに来ていて。でも、里親は養子縁組とは異

なり、子どもの戸籍は変わらないこと、家族同然に育ててくれて温かい家庭を経験できることなど、丁寧に説明を重ねる中で、里親委託を受け入れる決断をしてくださいました」

複雑な事情を抱える乳児院の子どもたち。一人一人の幸せを願い、今日も職員たちは力を尽くしています。



「これは、いくら?」七夕まつりで、楽しく社会経験を育みます

Area News

エリアニュース



全国各地、あなたの生活のすぐそばで
日本赤十字社の活動は行われています。



地元放送局の 防災イベントで 救助・救命活動などを実演



日赤福井県支部では、6月20日に福井市内の体験・交流型施設「TRETAS(トレタス)」で開催された「FBC(福井放送) まるごと防災DAY」に参加。赤十字救護奉仕団による救急車両の展示や、応急手当の実演を行い、来場者に災害時に役立つ知識や技術を紹介しました。また、福井市赤十字奉仕団のレクチャーによる防災グッズ作りも大盛況。集まった子どもたちが牛乳パックを使った救助笛や新聞紙を使ったスリッパ作りに挑戦し、楽しみながら防災を学びました。午後のステージイベントでは、救護奉仕団が他団体と協働し、崩壊した建物から救助された負傷者に、心肺蘇生や応急手当を実施する様子をデモンストレーション。雨天にもかかわらず多くの住民が来場し、防災意識の高さが伺えました。



震度7の大地震を想定 日赤第4ブロック 合同災害救護訓練



日赤では、災害時の相互支援などを行うため、全国の支部を6つのブロックに分けています。

6月6日、京都府の山城総合運動公園にて、日赤第4ブロック(滋賀、



「フレイル」対策で地域力を向上 奉仕団がフレイル予防サポーターに



小阿仁村赤十字奉仕団の原田眞貴子委員長は「『みんなの元気は地域の力!』を合言葉に、今後も積極的に普及していきます」と抱負を語りました。

日赤秋田県支部で実施している「フレイル予防サポーター養成講座」。地域奉仕団が中心となり、地域を活性化する取り組みとして、受講者が増えています。6月26日、高齢化率が県内トップで、村民の約2人に1人が65歳以上という小阿仁村で養成講座を実施。秋田赤十字病院の管理栄養士や理学療法士、県の歯科医師らが講師となり、30人のフレイル予防サポーターが誕生しました。同30日には、地域の公民館で早速サポーター活動を開始。スクワットやお口の体操「パタカラ」などを主導し、地域の健康増進に貢献しました。上



「赤十字農園」で苗植え 家族三世代に受け継がれる ボランティア活動



日赤石川県支部には、「赤十字農園」と呼ばれる、奉仕団が育む農園があります。この農園で収穫した野菜はパザーなどで販売され、その利益が赤十字活動に寄付されています。今年5月、鶴来ふれあい赤十字奉仕団ら15人が参加して、サツマイモの苗植えが行われました。参加者の山下彩香さん(大学1年生)は、高校1年生からこの活動に参加。「昨年、パザーで提供したスイートポテトが大好評だったので、今年も収穫が楽しみ。家族に持病があり、食事管理が必要だったことから、管理栄養士を目指しています。この農園の活動も学びになります」と、山下さん。この日も叔父と祖母と共に参加。4年間を振り返り、「地域の方との交流が楽しく、家族で活動できることがうれしい」と笑顔で話しました。

京都、大阪、兵庫、奈良、和歌山)合同災害救護訓練を実施。約450人が参加しました。今回は、生駒断層帯を震源とするマグニチュード7.5の直下型地震を想定し、宇治市で震度7など、京都府南部の広範囲にわたり甚大な被害が発生したという設定のもとで行われました。

発災直後に立ち上がった災害対策本部では、救護班からの報告や避難所の状況など、現場から上がってくる情報を整理し、必要な支援につなげるための調整を行いました。

実際の避難所を想定した訓練会場では、避難者のニーズを把握し、避難所運営を改善するための調査や評価のために、看護学生が扮する「避難者」一人一人に聞き取りを行い、災害対策本部へ支援を要請するまでの流れを確認しました。

一方、救護所訓練会場では、地震によりトンネルの崩落事故が発生した設定で、次々と運ばれる傷病者のトリアージ、けがの処置などのシミュレーションを行い、赤十字レスキューチェーン京都など多くのボランティアの活躍もあり、災害時の連携の強化を高めることができました。



「一度の経験が、いざという時の力になる」 全国各地の青少年赤十字(JRC)活動



日赤山形県支部では、JRC高校生メンバーが中心となって回収した書き損じはがきを原資に、海外の子どもたちへ文房具などを贈呈する「教育支援事業」を2010年から継続しています。昨年度、インドネシア赤十字社を通して10万円を送金し、ジャンバル県の小学校に「防災ノートブック」を寄贈したことをきっかけに、今年5月、寄贈先の小学校の児童と県内JRCメンバーとのオンライン交流会が実現しました。メンバーからは、「自分たちの活動が海外の子どもたちの防災につながっていることが実感できた」という感想が聞かれました。(①、②)

日赤は「誰かではなく、自分たちがするんだ」という意識を若い世代に広げるため、若年層への講習普及に力を入れています。6月9日、京都府支部では、JRC加盟校の京都市立北醍醐小学校の5、6年生を対象に、救急法講習を行いました。講習では長い説明を避け、人形を使った実技を中心に「自分たちにもできる」と実感してもらうことを重視。6年生は昨年の経験を生かしてレベルアップした内容に挑戦しました。胸骨圧迫を交代しながら絶え間なく続ける練習では、中断時間を最小限にする技術とともに、仲間と助け合う大切さを体験しました。(③)

愛媛県支部では、6月14日に、県内高校生向けに、ウクライナからの避難民家族を招いてセミナーを開催しました。避難民からは、現地での暮らしや紛争の影響、日本に来るまでの経緯と現在の生活についてなどが語られ、参加した約70人の生徒たちは真剣に耳を傾けました。グループディスカッションでは、「世界で起きていることを自分ごととして考えるべき」など前向きな意見が交わされる場面も。その後、生徒たちが観光ガイドとして街を案内するなど、地域の魅力を発信する企画も実施し、心の交流を深める機会となりました。(④、⑤、⑥)

6月30日、広島県支部では、中学生に向けて「いのちの授業」を実施しました。その中で、カンボジア赤十字社とのユース相互交流事業(6月号本コーナーで紹介)に参加した高校生ユースメンバーが発表。カンボジアへ渡航して気がついた、人と人とのつながりや平和の大切さ、国際人道法についてなどをテーマに自らの言葉で語り、「物の支援だけでなく、誰かを気にかける『思いやり』そのものが人を支える。その『思いやり』や感謝が、世界の平和につながる」というメッセージに、参加した中学生たちも真剣に耳を傾けていました。(⑦、⑧)

PRESENT!!

合計
**15名様に
当たる**

「ご当地ハートラちゃん」グッズをプレゼント

これらのグッズは、各支部のイベント・講習などに参加するともらえるチャンスも! (数量限定)

推しハートラ
応援アワード

A | 5名様 |

東京都 ナップサック

イチョウが描かれた「まわし」が粋だね!
おすすめハートラちゃん

サイズ: タテ約370mm×ヨコ約380mm
※画像はイメージです

B(セット) | 10名様 |

奈良県 アクリルキーホルダー

鹿せんべいで、お出迎え
鹿ハートラちゃん

奈良県支部のInstagramをフォローし、アンケートに協力すると、もらえる限定品。今回は特別に、赤十字NEWSの読者用に!

奈良県支部の公式Instagram

アクリル部分のサイズ: タテ70mm

千葉県 缶バッジ

ビーナッツに乗って、ひとっ飛び
ビーナッツ飛行機ハートラちゃん

千葉県支部のイベントに参加すると、もらえるかも

サイズ: 53mm
(デザイン2種のうち、どちらかをプレゼント)

岩手県 クリアファイル

太鼓の音が、夏を彩る
さんさ踊りハートラちゃん

想いの力を、救う力に。

岩手県支部の講習に参加するともらえるチャンスあり

秋田県 クリアファイル、シール

きりたんぽを手に、福をお届け
なまはげハートラちゃん

クリアファイルは、秋田県支部のイベントでももらえるかも。シールは赤十字NEWSプレゼントのみ!

日本赤十字社からのお知らせ

常任理事会、代議員会などの
会議開催や予算決算など
財務に関するご案内・ご報告は
こちら▶▶▶

赤十字NEWSオンライン版はコチラ▶

赤十字NEWSはWEBでも閲覧できます。ぜひアクセスしてください!

プレゼントは
右の二次元コードから
ご応募ください。
応募締め切り:
2026年8月31日(月)

※当選者の発表は
プレゼントの発送をもって
代えさせていただきます

ご応募は
こちらから▶

ベネズエラ地震

世界の「いま」WORLD NEWS

被災地に立ち続ける赤十字



被災地域で捜索・救助を行うベネズエラ赤十字社の救助隊員(6月24日撮影)

何が起こったの？

- ✓ 2026年6月24日、ベネズエラ北中部で大地震が発生
- ✓ M7級の強い揺れが連続発生。規模は過去100年間で最大級
- ✓ 被害は、首都・カラカスを含む7つの地域に及ぶ
- ✓ 死者5278人、負傷者16740人、住居喪失者17907人*

*7月20日時点、国連発表

ベネズエラ政府が国家非常事態宣言を発出

現地の課題

- ・多くの住宅や建物が倒壊、損壊の被害に
- ・電力や水、医療などのインフラ被害も深刻
- ・衛生環境の悪化により感染症のリスクが高まっている
- ・多くの人が家を失いスタジアムなどで避難生活を送る
- ・余震への不安や喪失体験による心理的負担も

そのとき、赤十字は…？

▶《ベネズエラ赤十字社》

- ・捜索、救助の継続
- ・救助された人々の応急処置と医療支援
- ・家族の再会支援(RFL)のための専用ホットライン設置
- ・水、衛生設備の復旧と環境改善
- ・被災者へのこころのケア

RFL: Restoring Family Links

▶《国際赤十字の支援》

- ・IFRCは発災直後に200万スイスフラン(約4億円)を拠出し、6月26日には5000万スイスフラン(約100億円)の緊急救援アピールを発出
- ・パナマからチャーター便で35トンの救援物資を輸送
- ・ICRCは安全な水の確保や尊厳ある遺体の取り扱いを支援



夜間の被災現場で、負傷者の救護活動を行うベネズエラ赤十字社の救助隊(6月24日撮影)



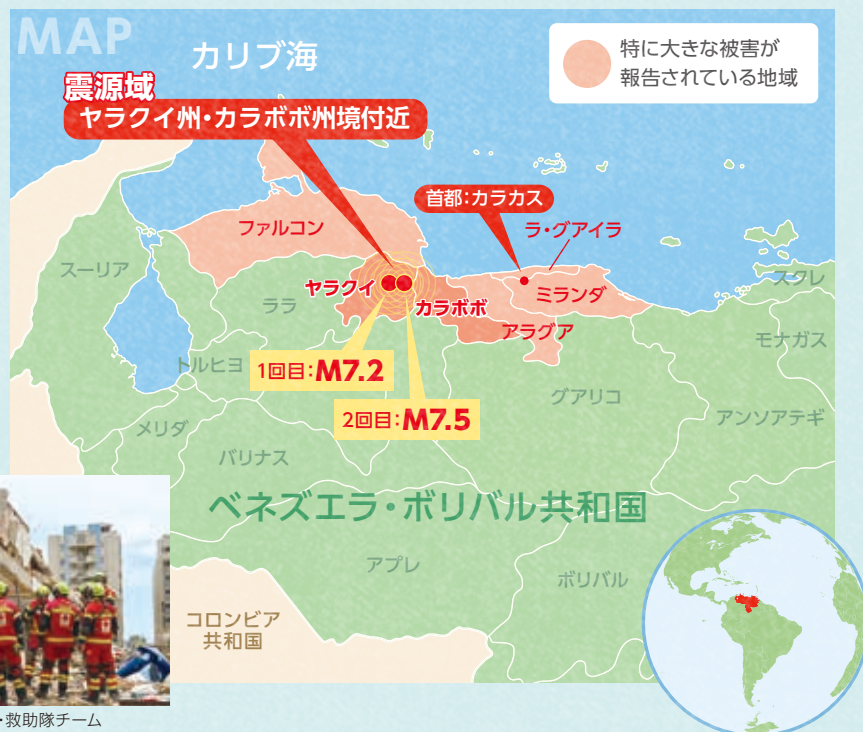
パナマからチャーター便で届いた支援物資。ターボリン、蚊帳、衛生キット、浄水器、毛布など

各国赤十字社も救援に

コロンビア、エクアドル、アルゼンチンなど中南米の各国赤十字社がRFLの提供や捜索・救助隊の派遣を実施。支援の輪はさらに広がり、スペイン赤十字社など、スペイン語圏を中心にその他の赤十字社も、医療や支援物資、給水・衛生の技術支援などを行っている。(7月8日現在)



メキシコ赤十字社の捜索・救助隊チーム(6月28日撮影)



赤十字の取り組み

自らも被災しながら、苦しむ人々を支え続ける

2026年6月24日(現地時間)にベネズエラで発生したマグニチュード7.2と7.5の強い地震は、首都カラカスを含む首都区とラ・グアイラ州を中心とした広範囲に甚大な被害をもたらしました。建物の倒壊などにより多くの死者、負傷者を出し、加えて、1万7900人以上の人々が住む家を失い、避難所や広場、スタジアムなどでの避難生活を余儀なくされています。公共交通機関の停止や停電、通信障害の発生などにより生活インフラにも大きな影響が出ているのに加え、1400回以上の余震が続く中、行方不明者の捜索・救助が続けられ、これまでに6400人以上が救出されています。

ベネズエラ赤十字社(以下、ベネズエラ赤)は、発災直後に緊急対策本部を設置し、国際赤十字・

赤新月社連盟(IFRC)や赤十字国際委員会(ICRC)、各国赤十字社・赤新月社と連携して救援活動を展開。約700人の職員と約3000人のボランティアを動員して、応急処置などの医療支援、家族再会支援(RFL)、安全な水の確保や衛生環境の改善、こころのケアにも取り組んでいます。ベネズエラ赤本社建物も大きな被害を受け、職員やボランティアの多くも被災者でありながら、日に日に人道的ニーズが高まる現地において、支援の手を休めることはありません。ICRCは、犠牲となった人々の尊厳を守るための遺体収納袋や被災者の健康を守るための浄水用塩素タブレットをベネズエラ赤と関係当局に提供しました。

日赤では、IFRCの緊急支援アピールに対し、即座

に1000万円の資金援助を決定。6月30日からは、「2026年ベネズエラ地震救援金」の受け付けを開始しました。さらに、高まる支援ニーズに応じて、追加で3000万円の資金援助を決定。今後も、ベネズエラ赤やIFRC、およびICRCらと緊密に連携し、支援を続けていきます。



負傷者の応急手当にあたるベネズエラ赤の職員(6月27日撮影)

VOICE 「支援する側も被災者。失意の中でも、活動を続けています」

地

震発生後から連日負傷者の治療を続けている、整形外科医のアントニオ・フェレイラさん。診療に訪れる人々は、体の傷以上に大きな痛みを背負っているといいます。「ほとんどが、逃げ遅れた子どもや高齢者。家族を失った彼らの話を聞くと、かける言葉が見つかりません。ある消防士は、倒壊した建物から多くの人を救い出しましたが、『自分の大切な家族を救うことはできなかった』と悔やんでいました。大きな悲しみを抱えながら、それでも苦しむ人々のために救援活動を続けています」。



赤十字ボランティア(医師)
アントニオ・フェレイラさん

失われた日常を取り戻すために



「2026年ベネズエラ地震救援金」